



有限会社栗駒建業

代表取締役  
たかはし わたる  
高橋 渉さん

# あすを拓く

職人の高齢化に人手不足、  
技能伝承のしくみの崩壊――。  
大工の未来を憂い奔走する  
工務店社長が、人づくりを設計する

**プロフィール**  
1974年、栗原市（旧栗駒町）で大工の長男として生まれる。仙台商業高等学校を卒業。92年、有限会社栗駒建業に入社し、2012年より代表取締役役に就任。同年、特定非営利活動法人「匠の右腕」を設立、木造建築技術の技能継承と人材育成に取り組む。現在、東北電子専門学校教員、東北工業大学非常勤講師、石巻工業高等学校講師も務める

手加工から機械加工へ  
建築業界の大変革を実感する

父親が創業した同社に入社した1990年代、建築業界では「プレカット工法」の波が押し寄せていた。

プレカットとは、木造建築で使用する材木をコンピュータ制御による機械加工で作る工場生産システムのこと。これまで大工が手作業で数週間かけて行っていた木材加工を、わずか数時間で終わらせることができることから、工期の大幅な短縮とコストダウンが期待される革命的な工法として一気に普及した。

「父のところにもプレカット工場の営業担当者がセールスに来ましたが、『大工の仕事を減らすことはできない』と導入しませんでした」と話す高橋社長。2000年代に入ると、周囲の工務店が続々とプレカット工法を受け入れていった。手加工の大工だけに頼る工務店は、「もはや絶滅危惧種だよ」と言われたこともあったという。

「プレカット工法が普及し、多くの工務店が自前で木材加工場を持つ必要がなくなりました。さらには大工も外注に頼るようになり、大工の棟梁が若手を一人前に育てる人材育成のしくみが崩壊し始めていると肌で感じました」と高橋社長は話した。

2011年、震災で被害を受けた住宅の改修・修繕の依頼が殺到した。「そこで困ったのは、家屋の改修や修繕ができる大工が少なかったことでした」

失われつつある技能伝承のしくみに  
危機感を覚え立ち上げる

既存の建築物の壊れた部分をピンポイントで直す作業には、大工の経験と手加工の技術が求められる。プレカット工法による新築工事が主流となっていた現在では、手加工の経験豊富な現役職人が減り、引退が近い50代、60代の大工の力に頼らざるを得なかったという。

「復興需要がひと段落すると、高齢な大工さんが次々と引退を始めました。『このままでは次の災害が起きた際に、大工が家を直せなくなる』と危機感を覚えました」

2012年に同社の代表取締役役に就任した高橋社長は、「若い大工を現場で育てる仕組みを作りたい」と地元工務店に声を掛け、NPO法人を設立。県内の工業高校や専門学校、大学での実技指導や、女性や子どもたち向けの大工の魅力発信イベントの開催などに取り組んだ。

さらに15年からは、大工を志望する生徒や学生が、建築業界の関係者の前で自らの技術を披露する「大工版就職セミナー」を実施。若手と企業のマッチングにも尽力している。

「こうして教育現場に足を運ぶようになり、学校も第一線の現場で活躍する大工のノウハウを求めていることが分かりました。そして、職業の選択肢の一つに大工を考えられる若者が増えてきたと手応えを感じています」

未来のものづくりと人づくりを担う  
大工育成工場の実現へ

次の目標は、若手大工の受け皿づくりだという。棟梁の高齢化が進む今、次の世代に技術を伝承する形が崩れかけている。そもそも自社で大工を持たない「職人不在の工務店」では、昔ながらの人材育成制度の再生は難しいと思っている。

そこで高橋社長が注目しているのが、山から切り出した丸太を木材に加工する製材工場である。

「林業のまわりの製材工場に見習い大工を集め、手加工の修業の場として受け入れます。引退した熟練大工が指導者となり、見習い大工を一人前に育て上げ、その大工がさらに経験を積んで次の若手を育てる。そんな人づくりのサイクルを再構築したいと考えています」

このモデルが実現すれば、工務店は地元製材工場から材木に加え、腕利きの大工も調達できるようになる。そして、地元材を使う「完全地産地消」が完成する――。震災後から思い描き続けた構想を力強く説明する姿は、使命感に満ちていた。

近年、日本の住宅でもリノベーションが注目を集め、昔のように一度建てた家を、直しながら住み続ける人が増え始めているという。「だからこそ、これからも木造建築を熟知した大工の力が必要なのです」と高橋社長は語った。



入社1年目の新人大工の2人。同社では、スムーズな世代交代が成功し、働く職人のほとんどが40代以下であるという

ある昼下がり、有限会社栗駒建業（仙台市）の1階にある木材加工場で、2人の若手大工が、木造家屋の骨組みに使う材木の加工に汗を流していた。材木を組み上げるときに材木同士を接合させる部分にノミやノコギリ、電動工具を駆使して様々な加工を施す。

「彼らは、入社1年目の新人大工です。私が講師を務めている専門学校の教え子たちで、現場で経験を積みながら一人前の大工を志しています」

こう説明する同社の高橋渉社長は、期待の若手の成長ぶりに目を細めた。

高橋社長は、建築業を経営する傍らで、NPO法人での活動を通じて教育機関への協力や学生と建築業界とのマッチングを行うなど、若手大工の育成と日本の木造建築技術の継承に力を注いでいる。



実技指導では、学生が家屋や物置を実際に組み上げる



「大工版就職セミナー」の様子。若手が実力を把握する場にもなっている



「大工の婚活イベントを企画して、地域づくりにも貢献したい」と語る

**有限会社栗駒建業**

1980年に、栗駒町（当時）の大工を率いて仙台市内で創業。40年間受け継がれてきた匠の技で、住宅の新築・改築を設計から施工まで請け負っている

所在地  
仙台市泉区市名坂字新門前 24-7  
TEL 022-373-3104  
<http://www.kurikomakengyou.com/>

